一心太助の天秤棒

～前の籠には責任を、後の籠には信頼を肩に担で売り歩く～

越谷市会議員　白川　ひでつぐ

シリーズ/NO　１７２号

Web サイト　Youtube　Twitter　Spotify

駅頭は小さなドラマの連続だ！

初当選以来６期２４年目。毎日毎朝続ける東武鉄道の市内６駅での朝の駅立ちは、通算４６００日を超えました。私の日々のツィッターのつぶやきから、転載したものを含め、駅前の様々な市民との出会いや何気ない駅前の風景、市民の日常を通した暮らしへの息遣いをエピソード集としてシリーズでお届けしています。

YouTube の白川ひでつぐ公式チャンネルの登録者は２９３名を超えました。引き続き配信を継続していますので、これまでのご協力に感謝し、更にご登録をお願いします。

チャンネル登録

伝統の獅子舞は、例年開催の真夏から、今回秋の開催へ変更された。

毎年開催されている「下間久里獅子舞列大祭」が、市内下間久里の下間久里香取神社で開催された。埼玉県無形民俗文化財に昭和５４年に指定されている。またこのお祭りは下間久里獅子舞連中によって保存、継承されており、毎年７月に開催されてきたが近年の地球熱帯化に伴う猛烈な暑さのため獅子舞を担う小学生も参加するなかで、長時間のお祭りに体調を崩す子どもたちも出ていた。

そのため今回から１０月の第一日曜日に異例の変更となったが、安全確保のための措置を最優先した結果だ。

この様な対応に変わったため、市長を始め来賓や主催者の挨拶は４３０年ほどの歴史的民



族文化も時代や社会の変化からやり方を改善せざるを得ない状況やそれでも伝統文化を地域で継承する意味についての話が触れられた。

伝統を継承するとは、その様態を引き継いでいくことだが、何故この様なお祭りが必要とされていたのか、どの様な人々によって開催され続けて来たのか、その本来の開催目的を正確に理解することを前提とする。

同時にその様態自身も変化させていくことが迫られるのは、社会や時代の大きな変化、つまり市民の関係性（社会の最小単位である家族さえも）が激変しているからだ。それは今起きている事象にも見ることができる。地域共同体の維持、発展こそが社会の規範とは、保守主義の思考である。つまり、常時改善を継続していくことを本望としている。それなくしては共同体を支える人々の慣習や掟を基盤とする地域社会や生き方を継続出来ないからだ。「保守したければ改革せよ。」　（１０月４日・日曜日）

早朝自宅を出る時は、辺りは真っ暗

今朝の駅立ちはせんげん台駅西口なので、午前４時に起床、自宅を出発する午前５時前はまだ夜が明けていなのだが、そろそろこの季節の空は真っ暗となっている。まだ真夜中の様に。

駅に到着して午前５時３０分までに何時もの様に街宣用具のセッティングと駅前清掃を終えて市政レポートの配布を開始した。

午前７時３０分過ぎ頃から独協中高校生の生徒が西口階段を集団で降りて来る。電車が到着するだびにドーッと制服姿でバックをさげて数百人が降りて来る。そして最寄りのバス停から学校に向かう大型バスでの通学のため列をなして長蛇の列が形成される。そのため列の整理のために学校の先生や学校から雇用された整理係の２人の高齢男性が

（裏へ）

毎回指示をして生徒たちを３列縦隊に整列させている。生徒たちはこの指示に従ってはいるのだが自主的には整列はせず生徒同士で談笑したり本を読んでいる。

毎日、毎日同じことが繰り返されているのだから、生徒自身が自ら整列すればいいし、高校生もいるのだから列に入らない特に中学生には注意すればいいとも思う。それでも困難ならば整理係を当番制にして生徒を担当役にとも。

しかし、全くこの様な手配がなされないま今朝も同じ光景を見ざるを得ない状況が続く。

だだし、この日は通常の５時間程度の睡眠なのだが、体調がすこぶる良好なので３時間を超えるマイクでの訴えも最後まで最初の調子で終えることが出来た。何時もは午前８時頃から話を続けることが困難となり、必死になって体力と精神力を集中して活動をすることが多くなっている。年齢と季節のせいだろうが。

しかし今朝はそんな状態でないため、声が張って、疲労も感じなく午前８時３０分過ぎに駅頭を終了して迎えに来た妻の車で帰宅したあとのコーヒーとパンの朝食に気分も更に落ちついた。年に数回だがこんなさわやかな活動が訪れる。　　（１０月８日・木曜日）

来年の統一地方選挙に挑戦する女性に立ちはだかる壁を突破する苦悩と当選後の壁

第１回　「政治の景色を変える人たち、変えていくわたしたち――ジェンダー平等な政治、どうつくる？」にズーム参加した。主催はピースアクションネットワーク。ゲストには鈴木なりさ（FIFTYS PROJECT×わたしたちのバトン基金）さんが。FIFTYS PROJECT は、政治分野のジェンダー平等を目指して、地方議会議員に立候補する 20 代・30 代の女性（トランス女性を含む）や、ノンバイナリー、X ジェンダー等の方を応援し、政治の景色を変える活動を続けている。2023 年 4 月の統一地方選挙では、支援・参加した 29 名のうち 24 名が当選。20 代・30 代の女性議員はいまだ地方議会で 1%程度にとどまりるが、ジェンダー平等の実現に取り組む議員が増えることで、議会で話し合われるテーマや政治の景色が少しずつ変わっていく。その可能性を確かに感じた 4 年間だった。さらに、2027 年 4 月の統一地方選挙では、100 名の候補者を支援することを目標としている。

ジェンダー平等な政治とは、どんな政治なのか。そして、誰もが自分らしく政治に関われる社会を、わたしたちはどうつくって行くのか。FIFTYS PROJECT のメンバーで、自身も地方議会議員選挙に立候補した経験を持つ鈴木なりささんの話では、女性が立候補する時に障害となるのは、子どもがまだ小さいから、資金が不足しているから、生活が安定していないから、という男性の立候補の障害とは違っている。だから女性は当選はおろか立候補時点から障害が存在している、と強調された。

その通りであり、当選後も同じような問題に度々襲われてもがき苦しむ議会や日常活動に苛められることが現実だろう。

まただからこそ、社会を変えよとして様々な困難な状況をのり越え、政策中心の訴えを全力で取り組んでいるのも事実だろう。

しかし、大選挙区制での市会議員選挙では、当選した途端、個別の（どんなに優れた公約でも）政策の実現には多数派の形成を必須条件とすることが常だ。だから意見が対立する議員への合意形成のやり方までも新人であっても必要とされるのだが、その話は皆無だった。

（１０月１３日・火曜日）

あなたに会うと、元気をもらうことが出来ますとの声に、私の方が励まされる

今朝の駅立ちは、大袋駅東口なので午前５時５０分頃から市政レポートの配布を開始した。開始した直後に５０代（？）のサラリーマンだと思われる男性から、あなたに会うと、何時も元気をもらうことが出来ます、と声をかけてもらった。ありがとうございます。気を付けていってらっしゃい、と応答した。

エスカレータを登っていかれたがショルダーバッグにはヘルプマーク・ホルダーが揺れていた。ほんの数分間のやり取りだったが、あーこんな会話にどれだけ励まされることなのか、私しか感じられないのだろうが。近年３時間近くの毎日毎朝取り組む駅頭が、体力の衰えで相当の精神力を必要としていることの影響を差し引いたとしても。更にその直後高齢男性が私の前に立ち止まり両手をズボンでこすりつけて丁寧に両手を差し出して市政レポートを受けとってもらった。こんな丁重な姿勢にも自らの活動の規律化を課すことを確認出来た朝となった。　　（１０月１４日・水曜日）